

## 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究Ⅷ(2) ——特殊学校および養護学校の自閉症児について——

中矢 邦雄 杉山 雅彦 前川 久男 小林 重雄

当研究室で治療訓練をうけた後に特殊学級または養護学校に就学した自閉症児のその後の経過を報告する。4名中2名は就職への可能性が出てきている。他の2名は、対人行動において改善が認められず、両親は、養護学校高等部への進学を考えている。また対人行動の改善・就職への展望と関わる条件として(1)長い行動連鎖の自発/調節を独力で出来ること。(2)多様な目標行動が設定され、多数の強化チャンスがあること。(3)クラスメートが互いに弁別刺激/強化刺激として機能し、言語行動が形成/維持されることが同定された。

キーワード：自閉症 追跡研究 学校適応

### 1. 目的

本報告は、前6報(杉山ら, 1979; 大野ら, 1980, 1981; 武蔵ら, 1983; 大野ら, 1984; 古田ら, 1985; 中矢ら, 1986)の続報である。就学前に当研究室で治療・訓練を受け、特殊学級または養護学校に措置された症例のその後の経過を報告する。

### 2. 方法

授業観察・学級担任とのインタビューにより対象児の学校での適応状況を評価する。知能検査・言語学習能力検査を実施する(ITPA, 田中ビネー, DAM)。

また家庭訪問の可能な場合は家庭での行動、進学・就労への展望等について両親にインタビューする。調査/検査は昭和61年度第一学期期間中に行った。

### 3. 対象児

各対象児の生育歴、訓練経過、就学後の状況は、Table 1を参照。

### 4. 症例

各対象児における検査結果は、Table 2を参照。症例1(D.I. 養護学校)

#### 1) 学校での状況

昭和60年度より地域に養護学校が新設され、こちらへ転校した。本児の在籍する中3クラスは男子5名、女子4名で構成され、スタッフは4名である。生徒の大半は、高等部に進学予定であり、具体的な職業訓練等は為されていない。“義務教育の仕上げ”として①基本的生活習慣の形成②社会性の育成③健康な生活④自己表現・個性の伸長が目標とされている。

体育・美術・音楽・学級活動はクラスで、行っている。指示が出るとその後細かく対応されなくても、持続して課題に取り組む。クラスメイトが逸脱するとそばに近付きじっとのぞき込んだりするが、明確な働きかけはしない。他児からの誘いには応じるようになる。

“ことば・認知”の学習は、発達段階別の集団で行われている。本児は自閉症を中心としたグループに属している。6名中会話の認められるのは、1名のみで、動作模倣・音声模倣・パズルの組立・分類等の課題を行っている。遊戯などの動作模倣が可能となる。“やりたい人”という指示に進んで答え容易にこなす。但し他児の遂行は時々

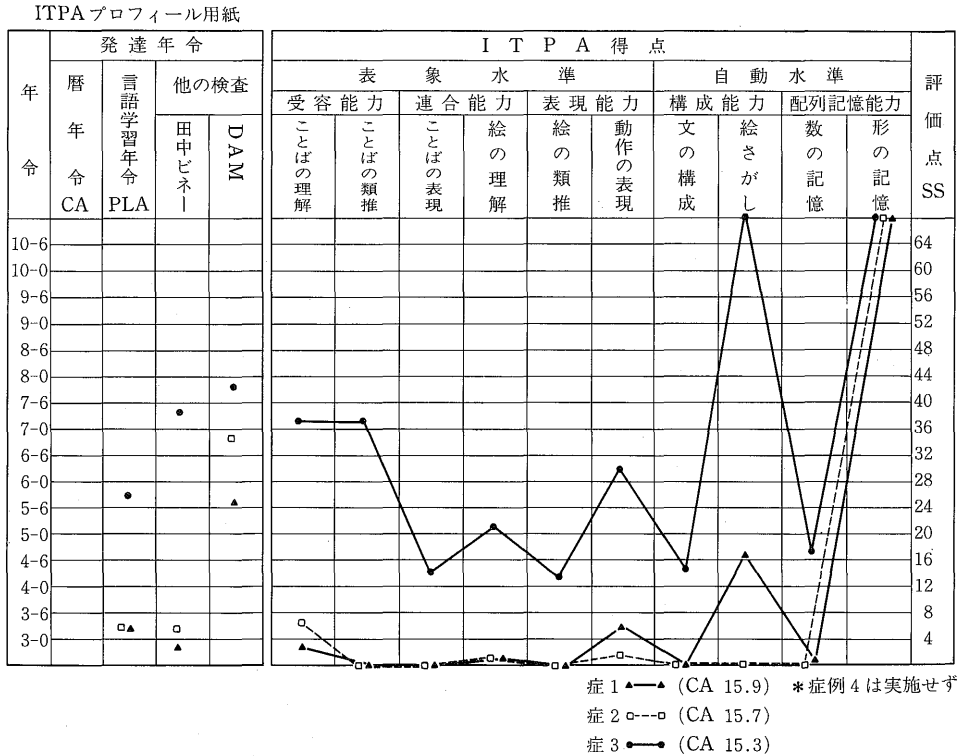
### 心身障害学研究科

心身障害学研究科の有松慶子, 教育研究科の渡部匡隆, 笹田俊樹, 進藤桂子, 人間学類の前津責子, 内地留学生の春山治三郎, 河野洋の諸氏から本研究の協力を得た。

Table 1 対象児（生育歴・訓練経過・就学およびその後の状況）

	症例 2 (D. I. 児)	症例 3 (M. I. 児)	症例 4 (R. O. 児)	症例 5 (A. K. 児)
性別・生年月日 生育歴	男子, S45.11.14yr1 妊娠中・出産時問題なし。 乳児期は、ほとんど泣かず 手のかからない子。 始歩12カ月。 2歳頃から視線が合わな くなり、3歳台で多動・落 ちつきのなさが目立つ。	男子, S46.1.13yr11 妊娠中問題なし。 かん子分べん。 乳児期は、なん語なく。 手のかからない子。 始歩13カ月。	女子, S46.5.13yr7 流産予防の注射を受ける。 逆子で出産。 乳児期はおとなしい子。 始歩10カ月。 何時間でも一人で遊ぶ。 呼んでも振り返らない。	女子, S46.12.13yr 妊娠中・出産時問題なし。 乳児期は、泣くことが少 なく、手のかからない子。 あやしても反応なし。 始歩16カ月。
主 訴	言葉がない。 落ちつきなし。	言葉がない。 人に無関心。	言葉の遅れ。 落ちつきなし。	全体的な遅れ。 言葉がない。 人の顔を見ない。
インテーク時状況	多動で、言葉がない。 発声は緊張を伴った、はき 出すような音である。 簡単な指示に従うことは 可能。 標識らしいもののみ描く。 (S51.9.)	発声は緊張した無意味音 のみで理解語はない。 たまに視線が合うが、表情 は固く人に無関心。 ドアが少しでも開いてい ると必ず閉める。 (S50.10.)	多動。 呼びかけに反応なし。 働きかけに対する拒否反 応が強く、接近すると奇声 を発して逃げる。 (S47.2.)	多動。 呼びかけに反応なし。 奇声がほとんどで、意味 をなさない。 指遊びと人に対する回避 反応が顕著である。 (S51.7.)
訓練期間 訓練経過	S51.9.~53.3. S51.9.~52.3. 学習態度の形成・絵カード 弁別・パズル学習。 S52.4.~53.3. 言葉の訓練。 「くつ」「りんご」等20語 が命名可能「ちょうだい」 の要求語が使用可能。	S50.10.~54.5. S50.10.~52.3. 学習態度の形成。 聴覚入力系に問題のある ことが明らかとなる。 視覚刺激(文字)による弁 別・命名訓練。 S52.4.~54.5. 文字学習・指文字の導入。	S49.2.~53.3. S49.2.~50.3. Y大にて個人指導。 S50.4.~52.3. 学習態度の形成・言語学習 (小会話、文字読み)・数 の学習。 S52.4.~53.3. 小集団指導。	S51.7.~56.3. S51.7.~53.3. 学習態度の形成。 課題学習。 S53.4.~56.3. 言葉の訓練(命名学習)。 (S55.1.~55.6.訓練 場面からの回避行動が現 われ、その消去ははから れた。)
猶予および就学	猶予理由：言葉がなく、落 ちつきがないため。 猶予決定後、幼稚園入園。 就学：言葉の使用につい て不十分であり、特殊学級 が適当であると判断され た。	猶予理由：聞き取りによ る言語理解に問題がある ため。 就学：自宅近辺に特殊学 級等がなかった。 S53.4.就学(普通学級)	就学：S53.4.(普通学 級)	猶予理由：児童相談所の 判断、母親の希望による。 就学：幼稚園での行動に 改善がみられたが、「重度 知能遅滞を伴う情緒障 害」という判定がなされ、 養護学校就学を決定した。 S54.4.就学(養護学校)
現在までの状況	54.9.(2年次)より体育 等の一部の授業で普通学 級への通級開始。 56.4.(4年次)普通学級 への通級を中止。	55.4.(3年次)に養護学 校へ転校。	53.4.(1年次)授業参加 を1時間とし、親がいつ しよに登校。 54.4.(2年次)に特殊学 級へ移籍。	
現在の学級の状況	養護学校中等部	養護学校中等部	中学校特殊学級	養護学校中等部
教 師	4	2		3
生 徒 (本児を含む)	9(3年)	6(2年)	8(3年)	10(2年)
カリキュラム	体育・美術・音楽・学級・ 活動/クラス ことば・認知/小集団・作 業(調理班)	生活・体育・音楽・美術/ クラス 作業(農芸班)	作業・生活/クラス クラブ(パッチワーク・陸 上運動)	体育・美術・学級活動/ クラス 作業(手芸班)

Table 2 各症例における検査結果



注視するが、促されなければ拍手等をしない。  
 発達段階に関わりなく生徒の興味に基づいた作業の設定では、最も積極的な取り組みがみられ、調理班で比較的多くまとまった仕事を丁寧にこなす。  
 指示を求めるとき、要求時には、短音の発声が見られる。日常の挨拶について一音づつの音声模倣が部分的に可能となっており、訓練を継続している。一方自発的な発声は、口をいっばいに開け舌を突き出した発声が多くレパートリーも拡大していない。

2) 考察

学習面・言語面で大きな変化は認められない。グループ学習場面は、①本児にとって容易な課題の設定②少ない遂行のチャンスと長い“待ちの時間”によって特徴づけられる。本児がこの様な場面で逸脱もせず大人しく指示を待っていることは、必ずしも望ましい行動とは言いがたい。それは指示のないときの行動の抑制・“自発性の欠如”を助長しているとも考えられる。手ごたえのある課題の設定、“待ち時間”において注視・応援など強化すべき目標行動を積極的に設定すること、が望

まれる。  
 言語行動の発信のための教育が必要であることが再三指摘されてきた。音声模倣を中心とした言語訓練が為されているが、自発的発語の増大やレパートリーの拡大がもたらされていない。他児への応答的対応が増えており、離席した他児に近付きじっと見るなど自発的接近が認められる。こうした場面の積極的利用と適切な示範が計画されるべきだろう。

またその様式に関しては、本児に特有の発語困難を考えると、一時期定着しかけた“身振り言語”等の再導入も併せて検討されるべきであろう。  
 症例2 (M.I. 養護学校)

1) 学校での状況

男子6名、スタッフ2名のクラスに属している。1名を除いて中1よりクラスメートで、言語行動のある3名が良きモデルとなっている。この内2名に対しては、特に親しみを持っているようで、本児からの働きかけが見られる。

指示の理解・発語の際に指文字の自発が伴い、また発声がそれに対応し分化している。読字行

動／書字行動が指文字を媒介として可能になってきている。名前・家族名・住所・電話番号が書ける。家庭では、母親の語り掛けを手がかりとして絵日記を書いている。

昨年度、昼食時の食器片付けに対する強い拘りが、タイムアウト、さらに罰の適用により4ヶ月で消失した。以後手を交差し、“だめ”と言う指示が行動の制止をコントロールするようになり、また自ら手を交差し制止するようになった。

作業では、農芸班に属する。余り積極的ではないが、最初に仕事の内容を説明すると、ほぼ理解しどんな仕事でも最後までやり遂げる。更に意欲的取り組み・見通しを持った取り組みを目標としている。

家庭では、特に調理に意欲的で、料理の名前を聞けば材料を準備する。不足した材料にも拘らないなど柔軟な対応も出来てきている。味付けや量など細かい点を除けば自力で調理が出来る。

現在バス・電車を乗り継ぐ通学路で自力通学の訓練を継続している。帰宅後は上記の家庭学習の外にテレビゲームや刺繍で余暇を過ごしている。

## 2) 考察

他児からの働きかけに対する拒否が消失し、応答的対応が安定して出現している。さらに自発的な他児への働きかけも少しずつ増大してきている。その主要な促進要因として①指文字をコミュニケーション手段として積極的に取り上げたこと、②指文字を媒介としより一般的な様式である書字行動・読み行動を形成／維持したことが上げられる。

固執行動に対する厳しい罰の適応は、一時的に待ちの姿勢を強め自発性の低下をもたらした。しかし現代では自らの“両手交差”により行動を抑制的にコントロール出来るに至っている。豊かな強化のチャンス为背景としてそれとは対照的な非強化・罰の適応が問題行動の消失の重要な要因の一つとして確認された。

行動の連鎖が次第に拡大してお、より大きな行動のまとまりに対し小数の強化を対応することが可能になってきている。中卒の時点で調理関係の職業につくプランがあるが、両親は進学・就職の判断をつけかねている。就労のためには、セルフケアのスキルを充実する一方、書字行動／読字行動による他者とのコミュニケーションと自己の行動の制御をさらに補強する必要がある。

## 症例3 (R.O. 特殊学級)

### 1) 学校での状況

クラスは、男子4名、女子4名、スタッフ2名により構成されている。メンバー全員が簡単な会話が可能である。①体力あふれる子、②自主性のある子、③心の豊かな子が学級目標とされ、作業・生活中心のカリキュラムが組まれている。

クラブ活動は、パッチワーククラブと陸上部に参加している。双方共において普通児と同じ水準の課題をこなしている。刺繍では、グループのリーダー的存在で、他児の指導もしている。マニュアルガイダンス・モデルによる指導により、現在はスタッフがそばにいないでもほぼ自力でミシンを操作できる。また特に強化の対応は必要とせず必要な時に寸法などについて質問をする程度である。

クラスの中で最も高水準でリーダーシップを取っている男子に好意を寄せており、時には、“好き”と言ったり、キスをしたりする。相手の男子も多少気まぐれだが気に入っている様子である。骨折をキッカケにある医師に憧れ、会えるときにはオシャレをしたり、羞らいを見せたりする。

6月に1週間乾メンの製造工場で包装の実習を行った。就労への意識は高く、洋裁学校に入学するという希望を持っている。そのために卒業を心待たしていて、指示に従わないときも“卒業できないよ”と言うとすぐに改める。能力適性検査を受けたところ、職能について最上位にランクされた。帰宅後はパッチワークや刺繍当を多数製作している。

デザインはテキストを参考にすが、色彩は独自に工夫し材料を買い揃える。バザー等では“明るい色合い”と評判がよい。両親は、電気店を数店経営しており、店の手伝いや“R子の刺繍コーナー”の設置というアイディを持っている。一方担任はより積極的に社会に出る方向を考えている。授産施設での就労から、就職・自立というプランを両親に勧めている。

### 2) 考察

教育のカリキュラムが作業・生活中心であることが本児の学級への適応を促進している。他のクラスメートとの関わりにおいては、リーダーシップをとるなど新しい展開が現れている。必要以上の指示待ちの態度がなく長い行動の連鎖を自力で発現・展開・終止している。

本児なりの将来の展望を持っていて、そのため

に現在の気の進まない事にも取り組むことが出来る。また特定の男子に好意をよせるなど情緒的な深まりが出てきている。

就労について、両親は以前と比べより現実的・具体的に受け止めている。両親のプランでは子供の興味・能力や成就感に重きがおかれ、一方担任のそれでは社会参加の側面を重視している。何れも就労において留意すべき大切な問題で有り、互いの発想を生かしたプランニングが望まれる。

#### 症例4 (A.K. 養護学校)

##### 1) 学校での状況

本児の在籍する中2クラスは男子4名、女子6名、スタッフ3名からなる。言語行動のある生徒は1名のみである。通常の授業はクラスで行われている。作業は適性に応じて園芸、木工、手芸の3班に分かれて行う。本児はこのうち手芸班に属し、スウェーデン刺繍に取り組んでいる。また週1回中学部全体で調理・地域美化の2班に分かれ長時間の実習を行う。実習の割当は学期毎に替える。

言語行動のある生徒がクラス全体に対するモデル示範者であり、やや過剰なほど他児の世話を焼く。この生徒が本児にとっても効果的な弁別刺激/強化刺激となっている。本児は体操の場面で他児の行動を観察し2-3秒遅れて動作の模倣を自発する。しかしスタッフがこれに対し無対応であることが多く、その後自己刺激様の動作を頻発すると制止する。上記の生徒以外からの働きかけは殆どない。集団からやや離れ、注視/待ち行動を自発する。

家庭では、単音の発生によるマンドの自発が安定している(10語程度)。但しレパトリーの拡大は認められず、自分で済ましてしまうことが多い。高い音に対する逃避やパニックは弱まっている。課題学習等の補強は家庭では行っていない。86年初頭に夜中に起きてしまうことが多くなり、精神科医の診察を受けた。以後投薬を継続している。

駅から学校までの通学は、ほぼ自力で出来るようになった。母親は進路について、高等部を経て施設入所を考えている。

##### 2) 考察

クラスメートとの対人行動においては、停滞が続いている。発語可能な者が少なく、本児への働きかけが少ないことがその一因であろうが、他児の行動に対する注視・模倣が自発されているにも

関わらず、それが殆ど強化されていないことを見逃せない。本児にとって最も明確な担任の対応は自己刺激様の動作の制止である。この動作が担任の関わりによって維持されていることは十分に考えられることであり、結果的に他児の行動を弁別刺激とした行動を抑制し、“担任との関わりを求め”逸脱行動を助長している可能性がある。

指示がないと行動が生起しない、また生起しても僅かな時間しか持続しない事が依然として問題となっている。①弁別刺激の提示が言語教示中心であること、②マニュアルガイダンスが多用されていること、③強化のチャンスが本児の行動を維持するためには不十分であることが、改めて検討されるべきであろう。目標行動の定義の見直しが必要とされる。

両親は、本児の就労の可能性は殆ど考えていない。高等部を経て施設への入所を予定している。高等部では、中学特殊学級からの入所者が多く、他児からの多様な働きかけが期待できよう。互いに強化に到るためには、相手の行動の生起が必要条件であるような場面を計画的に設定し、就労以前の基本的対人行動を改善することが、本児の将来の建設的な展望を図る前提となろう。

## 5. 総合考察

今年度は、4名中3名が義務教育最後の年を向かえ、進学・就職等将来の展望を図る大切な時期となった。4名中2名(症例2, 症例3)は就職への可能性が出てきている。他の2名(症例1, 症例4)は、対人行動において改善は認められない。就職が具体化せず、とりあえず高等部への進学が考えられている。対人行動の改善、就職への展望に関連して、以下の条件が上げられよう。

### ①行動連鎖の発現・展開・終止

担任等から特に弁別刺激および強化刺激を提示されなくても行動をイニシエイトでき、最終的な行動の結果に到れること。症例2における調理、症例3における刺繍がこの例である。何れの場合も行動への従事そのものがある程度のその維持要因になっている。また連鎖の途中では行動選択や修正の機会がある。

一方、症例1, 症例4も特定のルーティン行動では、一定の長さの単一の行動連鎖を担任の指示なしに自発するが、担任の対応にはより、ナイーブである。

②多様な目標行動の設定／強化チャンスの拡大  
症例1, 症例4では, 授業は短時間の遂行の機会と長い待ち時間のオルタネーションであり, 弁別刺激・強化刺激のエイドは主に担任である。

そこで期待されている行動は, “逸脱せず, じっと指示を待つこと”と“限られたチャンスを見逃さず, 着実に課題を行こなうこと”といってもよい。前者は, 行動の抑制性制御であり, 後者は安定した行動の出現を前提にしている。特に症例4のように当該の行動の出現頻度が極めて低い場合には, その目標設定自体に矛盾がある。自己刺激様の動作の扱い方に関してもクラスにおける強化システムそのものから再考する必要がある。

症例1では, 安定した課題遂行と待ち時間での無反応, 無表情が対照的である。授業開始時の他児への注目が急速に減少してゆくのが特徴的である。担任は, 応援や拍手の示範をしているが, それに続く本児の行動については全く無対応である。本児に限らず, 課題遂行時の方が積極的な取り組みがみられるのであり, むしろ強化の対応が不可欠なのは, 待ち時間の行動と思われる。

### ③言語行動の形成／維持

症例2は, 指文字の“聞き手”ができたことに続き学校で久しく消失していた指文字を安定して自発するようになった。他児からの関わりを拒否することがなくなった。またそれを基礎として書字行動／読字行動と言う, より多くの“聞き手”を期待できる言語行動が形成・維持されつつある。

症例3では, 既にクラスメート同士の行動コントロールと相互強化が安定してきている。

症例1並びに症例4では, 担任・母親など特定の“聞き手”に対しマンド・エコーイックなど特定のタイプの言語行動が自発されるにとどまる。

クラスメートの行動を弁別刺激とした行動は弱い強度で自発されているが, それに対する強化システムが十分に作動していない。クラスメートを弁別刺激提示者／強化メディエーターとして互いに機能させるような設定の必要性が示唆される。

知能検査の結果では, どの症例も動作性優位である。言語学習能力では, 症例1, 症例3において視覚回路優位である。またいずれの症例でも他の領域と比べ“言葉の理解”, “動作の表現”の能力が高い。症例1と症例2は, 知能検査, 言語学習能力検査のいずれかにおいても似た傾向を示しているが, その行動特徴や就職への可能性におい

て重要な差異が生じてきている。上記の諸条件についてこの2症例を比較することは障害児の社会的自立のための要件を同定する際に一つの示唆を与えるものだろう。

就職への可能性が出てきている2例は, それぞれ得意な“仕事”を持っている。特に症例3は, 具体的に服飾関係の仕事につくことを志望している。障害児の職業内容がともすれば単純作業のくりかえしが中心になりがちな事を考えると, 新しいタイプの障害児の就職形態として注目される。今後さらに, 実際に社会の中で強化されるための条件を明確にしてゆく必要がある。

## 文 献

- 1) 古田真理・中矢邦雄・武蔵博文・森田智子・辻正子・大野裕史・前川久男・小林重雄 (1985) 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究VI(2), 心身障害学 研究, 9(2), 113-121.
- 2) 小林重雄・杉山雅彦・山根律子 (1978) 自閉症児の指導過程に関する研究(1)—T—CLACの標準化, 心身障害学 研究, 2, 99-107.
- 3) 武蔵博文・大野裕史・徳増久子・中矢邦雄・平田幸宏・鈴田真理子・古田真理・石川健・五十嵐隆夫・池弘子・小林重雄 (1983) 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究IV(2), 心身障害学 研究, 7(1), 39-47.
- 4) 中矢邦雄・武蔵博文・福島直子・大野裕史・前川久男・小林重雄 (1986) 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究VII(2), 心身障害学 研究10(2), 87-95.
- 5) 大野裕史・杉山雅彦・張正分・田中祐子・小林重雄 (1980) 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究II(2), 心身障害学 研究 4(1), 92-100.
- 6) 大野裕史・徳増久子・中矢邦雄・是永仁・杉山雅彦・池弘子・小林重雄 (1981) 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究III(2), 心身障害学 研究, 5(1), 13-29.
- 7) 大野裕史・古田真理・平田幸宏・森田智子・武蔵博文・鈴田真理子・小林重雄 (1984) 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究V(2), 心身障害学 研究, 8(2), 92-100.
- 8) 杉山雅彦・反保真弓・田中裕子・張正分・池弘子・小林重雄・長畑正道・斉藤義夫 (1979) 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究I(2), 心身障害学 研究, 3, 111-120.

## Summary

### The Follow-up Studies of Handicapped Children with Autistic Symptoms concerning School Adjustment VIII(2)

—in special classroom/special school for the mentally Handicapped—

Kunio Nakaya

Masahiko Sugiyama

Hisao Maekawa

Shigeo Kobayashi

Four autistic children, who had been trained in our laboratory before their entrance into the primary school, are evaluated with regard to their adjustment to the class. The data are collected through the observations of their behaviors at classroom and through the interviews with teachers/family members.

2 out of 4 cases have successfully developed their prevocational/social skill. Parents/teacher seek for employment so that the child will get some job in the community. The others do not show remarkable improvement in interpersonal behaviors. It is planned that they will enter into a senior high school for special education.

Behaviors, in which the first 2 cases are quite different from the others, could probably be compatible with and facilitate a successful living and employment in the community.

The behaviors and the appropriate classroom settings are

- (1) The child initiate/coordinate some length of behavior chain.
- (2) The child have a frequent access to a variety of reinforcer.
- (3) The child have discriminative/reinforcing stimuli in/through classmates' behavior.

**Key word:** autism, follow-up, adjustment to the class